アジア８か国の子どものレジリエンスとウェルビーイングに関連する因子の探究

「CRN 子どもの生活に関するアジア 8 か国調査 2021」分析結果からの検討

企画・司会： 榊原洋一 （お茶の水女子大学、チャイルド・リサーチ・ネット）
話題提供者： 小川淳子 （チャイルド・リサーチ・ネット、ベネッセ教育総合研究所）
持田聖子 （チャイルド・リサーチ・ネット、ベネッセ教育総合研究所）
佐藤朝美 （愛知淑徳大学）
指定討論者： 岐部智恵子 （お茶の水女子大学）

[企画主旨]

新型コロナウイルスのパンデミック（COVID-19）は、子どものあらゆる生活圏を巻き込み、子どもの生活、発達、成長に大きな影響を与えている。すでに数多くの調査研究によって、子どもの身体的健康、発達、社会情動に COVID-19 が与えたネガティブな影響が明らかになっている。

一方子どもには、様々な逆境に適応し、乗り越える心理的特性であるレジリエンスが備わっていることも多くの研究が証明している。

本自主シンポジウムでは、チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）が 2021 年 8～11 月にアジア 8 か国の研究者、教育者と共に実施した、子どものレジリエンス（困難な状況に適応して回復する力）とウェルビーイング（心身の良好な状態、幸福）と、子育て、保育環境、COVID-19 の状況の関連についての「子どもの生活に関するアジア 8 か国調査 2021」の結果についての話題提供者からの報告をもとに、子どものレジリエンスを保障する社会のあり方について検討を行う。

「調査の概要／コロナ禍での子どものウェルビーイングとレジリエンスの育成について」

小川淳子（チャイルド・リサーチ・ネット、ベネッセ教育総合研究所）

本調査に参加したアジア 8 か国は日本、中国、フィリピン、マレーシア、台湾、インドネシア、シンガポール、タイである。調査対象は 5 歳または 7 歳の子どもをもつ母親で、調査方法はアンケート調査であった。有効回答数は 5 歳の母親 1,973 名（全 8 か国）、7 歳の母親 1,372 名（中国、シンガポールを除く 6 か国）であった。なお子どものウェルビーイングを測定する尺度として、本調査では QOL（Quality of Life＝生活の質）を広く測定できるように開発された KINDL 尺度（Ravens-Sieberer & Bullinger 開発）を使用した。また子どものレジリエンスの測定には、PMK-CYRM-R 尺度（カナダの Resilience Research Centre 開発）を使用した。

調査は 5 歳または 7 歳の子どもをもつ母親を対象に実施したが、本報告では 5 歳のデータを抽出して行った分析に焦点を絞る。分析結果より、8 か国共通で、子どものウェルビーイングにレジリエンスが関連していることが明らかになった。レジリエンスが高いほど、子どものウェルビーイング得点が高いということである。そのレジリエンスの向上につながる要因について分析したところ、日本では①母親の応答的な養育態度、②母親の子育て肯定感、③園（保育者）のサポート、④デジタルメディア使用時の母親のサポート、⑤遊ぶことができる友達の数が、子どものレジリエンスに関連していた。子どものレジリエンスを育むには、子どもにとってもっとも身近な存在である「家庭（保護者）」と「園（保育者）」の両輪でのサポートが重要であると考える。

「アジア８か国の子どもの日常生活と母親の子育て意識の概観」

持田聖子（チャイルド・リサーチ・ネット、ベネッセ教育総合研究所）

8 か国の 5 歳児の子どもの生活実態と、母親の教育観、育児意識について記述統計から概観し、日本の特徴を報告する。子どもの平日の主な活動を平均時間でみたところ、睡眠時間は全体で 9 時間 23 分であり、全体より睡眠時間が短かったのは、日本・台湾・インドネシアの子どもたちだった。しかし、いずれも 9 時間は超えていた。全体での平均値を基準にすると、日本の子どもは、屋外での遊びと、家庭での学習時間が低かった。多くの国で、コロナ禍の影響により「屋外で自由に遊ぶ時間」が減り、「屋内で自由に遊ぶ時間」と「メディアの視聴・使用時間」が増えていた。日本は屋外遊びについて、

減った（46.3%）と変わらない（45.5%）と回答しており、元々、他国に比べて屋外遊びの時間が短い可能性がある。

母親が子育てで力を入れていること 15 項目では、日本の母親は、他国に比べて、「文字や数を学ぶこと」、「伝統や文化を大切にすること」、「自然とたくさんふれあうこと」、「友達と一緒に遊ぶこと」を重視する比率が低かった。「伝統や文化を大切にすること」が低いことは、2017 年にベネッセ教育総合研究所が実施した 4 か国での調査でも同様の傾向だった。日本の母親の子育て満足感は、7 か国に比べて有意に低かった。子育て満足感には、配偶者の育児や妻への情緒的なサポート（加藤他, 2022）が関連することが先行研究で示されているが、本調査でも、フィリピン以外の 7 か国で、父親の家事や情緒的サポートは正の有意な相関がみられた。父親の育児参加については、日本とフィリピンは有意ではなかった。尚、日本の父親の育児や、母親への家事や情緒的サポートの平均値は他国に比べて低い傾向にあった。園の保育者はアジア各国の母親にとってしつけや教育の情報源であるが（ベネッセ教育総合研究所,2018）、本調査では、日本を含む 5 か国で、園の保育者の子どもや母親への良好なかかわりが、母親の子育て満足感と正の有意な相関がみられた。コロナ禍の環境の中で、子どもの遊びの環境には変化がみられること、母親の子育て満足感には、父親や保育者のサポートが有効であることがうかがわれる。

「デジタルメディア使用時における親のかかわりに着目して」

佐藤朝美（愛知淑徳大学）

本調査から、デジタルメディア使用時における親のかかわりに着目して報告する。コロナ渦での影響で、屋内遊びの時間やデジタルデバイスの視聴や活用の時間が増加しているという 8 カ国の共通した傾向が明らかになっている。デジタル化の進展にともない、今後も家庭における子どものデジタルメディアの使用時間や活用方法は大きな課題となるであろう。そこで重要となるのが親による子どものメディア利用への介入や取り組み（Parental Mediation：以下 PM）である。PM は、子どもがメディアから多くの利益を得て、負の影響を最小限に抑えるための仲介とされる（橋元・久保・大野, 2020）。本調査の日本の 5 歳児の結果では、デジタルメディア使用時の母親のサポート度合いが高いほど、子どものレジリエンス得点は高いという結果を示している。特に、「子どもが使用・視聴するものを親が選ぶ」「子どもが使用・視聴している様子を気にかける」「使用・視聴時間を決めるよう声をかける」「子どもが難しいことに取り組めるよう支援する」の 4 項目が効果的であった。しかし、この 4 項目の関わりは、他国と比べると低い傾向にある。その背景には、日本ではデジタルメディアを多用途で使わない傾向を示していることと関係があることが推察される。日本の 5 歳児の用途の多くは、「動画を視聴する」「文字や数遊びをする」「本・絵本を読む（電子書籍含む）」「お絵描きをする（塗り絵を含む）」「音楽を聴く」という 5 項目であり、他国と比べて少ない。学習利用の項目が多い中国では、「知らないことが出てきた時に一緒に調べる」の関わりが高く、デジタルメディアの活用の種類が増えるほど、PM も益々重要になると考える。